



堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

《進路講演会を行いました》

2月29日(木)に体育館で進路講演会を行いました。講師として、北区立王子第三小学校主任教諭 江原様、皇宮警察本部 皇宮警部補 山本様にお越しいただきました。お二人とも自身の中学・高校・大学でのエピソードを取り入れて大変分かりやすく講演してくださいました。お二人とも阿久津の教員時代の教え子ですが、それぞれの職業で立派になられていて、大変感動いたしました。これから堀中生のみなさんが、人とのつながりやご縁を大切に、次世代を担う立派な社会人になっていくことを楽しみにしております。



《3組 感動的なお別れの会でした》



3月6日(水)に、3組お別れ会が教室で行われました。お世話になった3年生のため最高の会をしてあげようと、1・2年生が毎日、コツコツと準備を頑張ってくれました。お世話になった3年生の2人への感謝の手紙や、もうすぐ卒業する3年生からの在校生へのメッセージや歌にも感動しました。心のこもったおもてなしで、とっても素敵なお別れ会でした。お2人の卒業生に「幸多かれ」と祈っております。

《3年生校外学習 ランチクルーズ テーブルマナーも学んできました》

3月11日(月)に、3年生は校外学習でランチクルーズに行ってきました。日の出の頭から出発し、東京湾を巡る船の旅でした。3年生のみなさんは、テーブルマナーをととても上品にこなしながら、美味しいフレンチを堪能しました。楽しい思い出がたくさんできましたね！



《祝 第68回卒業式を無事挙行了いたしました》



3月19日(火)、第68回卒業式を無事挙行了いたしました。厳粛な雰囲気の中、73名の卒業生に卒業証書を授与しました。ご来賓代表として、副区長中嶋様、小林PTA会長よりご祝辞を頂戴しました。在校生を代表して2年中村さんが送辞をおこない、答辞は卒業生を代表して渡邊さんが行いました。祝辞も送辞も答辞も大変素晴らしい内容で、式歌や最後に全員で歌った校歌にも胸が熱くなりました。感動あふれる素敵な卒業式となりました。ご参加くだ

さった在校生代表のみなさん、ご来賓34名、保護者115名の皆様、誠にありがとうございました。

《祝 2年寺嶋さん・高橋(海)さん、北区はばたき賞受賞おめでとうございます》

2年生寺嶋さん・高橋(海)さんが、バトントワリング全国大会トリルダンス部門で見事優勝するなどの功績を認められて、北区はばたき賞を受賞しました。本当に素晴らしい受賞です。おめでとうございます。

津田梅子の生き方（11） ～実り豊かな留学～

梅子に許された留学期間 2 年のうち、最後の半年は教育・教授法の研究に当てられていたので、梅子は州立オズウィゴ師範学校に学ぶことを決め、1891(明治 24)年 1 月、オンタリオ湖東南の湖畔にある小さな町、オズウィゴで充実した時間を過ごしました。

梅子は自身の学校生活が恵まれたものであることを自覚すればするほど、この素晴らしい体験を日本の女性達にも分かちたいという想いを強くしていきました。さしあたりの仕事として、自分が帰国した後、代わりの留学生を送ることができるようにするための資金が集められないものかと考え始めます。そんな中、梅子はアメリカでお世話になっているモリス夫人等に相談する内に、次のような方法を思いつきます。それは、募金を 8,000 ドルほど集めて、奨学金制度を設立することでした。その基金の利子で、3～4 年目ごとに 1 人ずつ、日本からプリンマー大学に学生を送ることができること分かったのです。ほどなくしてモリス夫人の発起で、奨学金募集のための委員会がつくられると、「日本婦人米国奨学金」の名称で募金を開始しました。

また、時を同じくして、梅子自身もさらに研究生生活を続けたいとの希望を持ったため、留学延期の願いを華族女学校宛に出していました。その結果、華族女学校は一時休職とし、別に「米国留学中女子教育の取調を命ず」という名義を得て 1 年間の留学延期が認められました。

梅子は 7 月にはオズウィゴを去り、その夏は、最初の留学で家族同然だったランマン宅で過ごすことができました。そして、募金のため、日本女性について、特にその教育の必要性について、フィラデルフィアやボストンなどで講演をしてまわりました。講演の中で、もし、日本女性にアメリカで学び得る道が開かれるなら、彼女たちは外国人が日本人を教えるよりも、はるかに有能かつ適切な教師となって帰国し、後進の教育に尽くすことができること、そのためには日本女性がアメリカで 4 年間大学教育を受けることが必要であり、それを可能にする基金の設立のため 8,000 ドルが必要であることなどを訴えました。

梅子は留学期間の 3 年のうち、最後の 1 年間は奨学基金募集のためかなりの時間と労力を捧げましたが、幸い、募金も予定金額を達成し、1892(明治 25)年 6 月には、立派な成績でプリンマーでの学業を終えました。プリンマーでの生活に、さらにオズウィゴの勉学を合わせると、梅子の 3 年の留学期間は実り豊かなものでした。1892 年 6 月 28 日にローズ学長の名前で発行された梅子の証明書には、梅子が在学中の 2 年半の間に歴史・生物・英文学・化学・経済学・哲学の諸科目をおさめ、全てに優秀であり、勤勉な学生であったこと、特に生物・化学においては優れていたことが記されている上に、梅子の英語が読み・書きとも見事で、英語を教えるのには最適であること、梅子の人となりは誠に立派で、教授・学生の尊敬の的であったことなどが合わせて記述されています。

また、この 2 度目の留学で梅子が出会った人の中で、プリンマー大学学部長の M.ケアリ・トマス先生も、帰国後の梅子に大きな影響を与えた重要な人物です。トマス先生は、アメリカで女性が男性と対等な高等教育の機会を得られるように生涯を費やして尽力した教育者です。女性も等しく学び、考えることで、文学や科学の重要な分野で男性と競合できることを主張し、信条としていました。プリンマー大学の創設時に学部長として就任したトマス先生は、女性性を重視した創立時の学長の方針をくつがえし、「道徳修養から学術的厳格さを重視」した方向へ導き、先進的な教育理念に変化させることに尽力したのでした。トマス先生に指導を仰いだ梅子は、留学していた期間だけではなく、帰国した後もトマス先生から助言や支援を受けることとなります。トマス先生との出会いは、梅子が長年にわたって温めてきた夢の実現に大きな力を与えたのです。

留学期間を終えて帰国の用意をしている梅子に、「アメリカに留まってさらに研究を続けてはどうか」というプリンマー大学からの申し出がありました。またとない機会に、梅子の心は動揺します。さらに高度な研究を行って科学界の発展に貢献することも、十分過ぎるほど魅力的だったからです。しかし梅子は、個人の研究意欲を満たすよりも、教育の遅れている日本女性のために尽くすことの方が大事だという自らの考えを改めて信じることに決めました。既に奨学基金もほぼ予定の額に満ちていたため、梅子は 1892(明治 25)年 8 月に帰国し、翌月から気持ちも新たに華族女学校へ出勤しました。